

冠崎のヤマモモを守る人

「準備はできましたか。」

担任の山岡先生の声にわたしは、

「はい。」

と、元氣よく答えた。わたしたち六年生は総合的な学習で地域の歴史について調べている。わたしの住む^(注)冠崎には、呉市の天然記念物になっていてるヤマモモがあり、わたしはそのヤマモモについて調べているのだ。

冠崎のヤマモモは、樹齡約三百年ともいわれ、四月ごろ、枝の先に黄色の小さな花をつけ、初夏に果実が赤く熟し、果実は小さく卵形で、食べると甘味がある。樹皮は、下痢やはれ物などに効く薬として昔から重宝され、以前この家の人が漢方医をしていたころには「このヤマモモにさわれば病が治る」とも伝えられ、音戸や倉橋、そして遠くは愛媛の島々からも病人が船で訪れたということだ。

今日はそのヤマモモのある柳原氏別宅を訪れることになってい

やなぎはらしべのたく

た。実は訪れるのは今日が初めてではなく、低学年の時、生活科の時間に何度か訪れ、ヤマモモの実をとってヤマモモジュースを作ったことがある。

(ヤマモモはどうなっているだろう。)

そう思いながら、わたしは山道を歩いて行った。

山道を登り切ると、見覚えのある白い壁の門の柳原別邸が見えてきた。その上から見下ろすように、ヤマモモがそびえ立っている。実がなる時期は過ぎ、ヤマモモは、特徴的な細長い葉を上げらせていた。わたしは、ヤマモモのところに行き、幹の大きさや葉の大きさを調べた。ヤマモモを観察していくうちに、ヤマモモの葉や枝がまるで読んでいされているかのようにきれいな形になっていることに気がついた。

(そういえば、先月大きな台風がきたのに葉も落ちてないし、とてもきれいだねだろ。)

その時、奥から一人の老人が出てきた。その老人は、ヤマモモの周りを掃除し始めた。わたしは、しばらく見ていたが思い切って話しかけた。

「こんにちは。おじいさんはいつもここの掃除をしているのですか。」

すると、その老人は、

「そうだよ。ヤマモモとこの庭を毎日掃除しているんだよ。」と答えた。

「おじいさんは、ここのおうちの人ですか。」
わたしが聞くと、おじいさんは首を横に振った。
「じゃあ、なぜ掃除をしているのですか。誰かに頼まれているのですか。」

もう一度聞くと、また、おじいさんは首を横に振った。
「誰かに頼まれたからじゃない。このヤマモモがいつまでも美しくいてほしい。そう思っただけで、何十年もこうして掃除やヤマモモの手入れをしに来ているんだよ。」

その後、おじいさんは、このヤマモモは、昔から冠崎の人たちの誇りだったこと、ヤマモモが呉市の天然記念物に決まった時とてもうれしかったことなど、いろいろな話してくれた。

おじいさんの話を聞いて、わたしは今の自分を振り返り、なんだか気持ちが悪くならずんできた。小さいころバレリーナにあこがれ、習い始めたがすぐに練習が楽しくなくなってやめてしまった。今はピアノの先生になりたくてピアノを習っているが、もうすぐコンクールだというのに、毎日三十分の練習をするという目標をいろいろ理由をつけてできていない。今までわたしは夢のために何かを続けてがんばってきたことがあるだろうか。黙り込んだわたしにおじいさんは、「今まで何回かやめようと思ったことがある。」

「わしが掃除や手入れをしていることは誰も知らないし、ほめてもくれるわけではない。やらなくてもいいかと思うこともあった。実際、何日か行かなかつたことがある。じゃが、ヤマモモやその周りが荒れていくのを見て、すぐにまたやり始めた。いつまでもヤマモモが冠崎の象徴として美しく存在してくれることが自分の夢じゃからな。」

そう言って、またおじいさんは掃除をはじめた。わたしは、おじいさんの姿をしばらく見つめていた。そして、心の中で思わずつぶやいた。

（今日からでも遅くはない。また、毎日三十分のピアノの練習を始めよう。）



(注) 冠崎(かぶらさき)
阿賀の最南端・
阿賀南九丁目